少し、不思議な話。

十萌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
少し、不思議な話。

【Ｎコード】
Ｎ８９５３Ｚ

【作者名】
十萌

【あらすじ】
どこにでもある家の、普通のお話。暖かい昼下がりの、何てことない兄妹の会話。――ただちょっと、人とは違うものが見えているだけで。

昔から、その人はそういうものなのだと、何の疑問も持たずにいた存在だった。小学校の中学年ごろから、少し、違うのではないかと不思議に思い、中学校に入学した頃に、ああ、違うのだと納得した。

高校を卒業し、大学入学を控えた春休み、始まりだと思えるその場所で、何をするでもなくぼーっとしていた。遠くでバイクの音が聞こえ、子供たちの笑い声が響き、猫は素知らぬ顔で目の前を通り、春の匂いがして、隣に兄が座った。

「……何？」
「何って何？」
「いや、隣に座ったから何か用でも有るのかと思って」
「やー、別に何もないけど」
「ふーん……」

兄と私は、淡々と話す。友人に心配されたこともあったが、兄妹仲が悪いわけではない。家族相手にわざわざテンションを上げて話すこともない、というか、友人と対応が違っていて当たり前ではなかろうか。別に作っているわけではないが、どちらかと言えば、お互いこれが素なのだろう。

先程まではただぼけーっとしていたが、今度は兄に意識を向けた。春眠暁を覚えずとはよく言ったもので、例にもれず、兄も眠そうにうとうととしていた。つられて、私も眠くなってきた。ぽかぽか陽気が心地よい。あ、これは、お昼寝コース決定ではないでしょうか。この流れに身を任せれば絶対安眠が確約されて……などと、すっかり睡魔に全面降伏しようとしているところへ、話かけられた。

「なあ……」
「んー？」
眠いぜ、ｍｙ　ｂｒｏｔｈｅｒ。あなたも眠る流れだったじゃない。
「まだ、見れる？」

寝ぼけているともとれる、私たちの間でしか通じない、その言葉。その一言に、今日は原点回帰の日だったかな、などと思った。それと同時に、始まりを思い出していた。

幼いころ、私は……
「やっ、にーちゃのとなり！」
何かにつけては兄の隣を占拠し、
「いっしょ～～、ぅえ、ッひ、にぃちゃと……」
頑なに兄と共に在ることを願い、
「にーちゃ、まって」
そして、兄がそばを離れることを許さなかった。

今思えば、ブラコンという奴ではないか？　と思わなくもないのだが、今、だ。昔はそんな自覚があろうはずがない。現在は普通に家族愛……いや、昔もそうだけど、ほどほどの距離を保っている。まぁ、そんな幼いころの可愛い妹を、兄は
「うるさい、ついてくんな！」
「ぼくはみーちゃんよりみんなと遊びたいの」
などなど、結構鬱陶しがってくれていた。うん、今なら理解できるけどね！？　小学校入学前の幼児に遊びたい盛りの子の心境を解れって方が無理だから。家族と居た時とかは良いけど、幼稚園に行ってる時は本当に、うざそうにしてたなぁ……今思えば。なんで、あんなに兄が好きだったのだろうか、めげなかったのだろうか。

あの日も変わらず、兄の後をついて回っていた。ぴこぴこと、迷子防止の靴音が、静かな神社に鳴り響いていた。目の前にいる兄に追い付こうと、ちょっとかけ足だったように思う。すると、ぴたりと止まり、追い付くのをじっと待ってくれていた。私はそれが嬉しくて、でも疲れていたから速度を落としてゆっくりと兄に近づいた。ぷきゅ～、ぷきゅ～と踏む出すごとになる音は苦手だったけど、靴のクッションは嫌いじゃなかった気がする。目の前に回り込み、にっこお～と満面の笑みを浮かべた。そして兄は、盛大なため息をついた。

「にーちゃ、どこいくの？」
「もー、みーちゃん、ついてきちゃだめだっていったでしょ！」
「にーちゃといっしょー」
「おかあさんにもだめっていわれたでしょ！」
「いーくーのー」
「だーめーなーのー」
「めーじゃない！」
「だめ！」

駄目か、そうじゃないかの押し問答に、どちらも譲らず、二人とも思い通りに行かないことに感情が高ぶり、涙目になっていた。そして、負けたのは、兄だった。

「もういい！　みーちゃんなんかしらない！！」

それを言われてしまったら、私にはもうどうもできない。『知らない』とは、自身の存在をないものにされるのと同義である。本質的に理解していた私は、びくっと怯んだ後、兄が去る背中を見送るしかなかった。追い縋ることが出来たのは、兄の姿が見えなくなり

そうになってからだった。
「にーちゃあぁぁぁっ！　まっ、まっ……にぃちゃ、にいちゃああぁぁ」
もう、泣きに泣いた。泣けば何とかなると無意識に解っていた私は、全身で引き留めるべく、その場に寝転び、両手足をバタバタさせ、痛みなど気にせず、兄が戻って来てくれることを期待していた。嫌なクソガキである。泣きながら暴れる様は正に怪獣だし、泣きすぎて「うぉぇ、お、お、」……吐きそうになるし。しかし思惑通り、兄は戻って来てくれた。
「もー、じめんにごろんごろんしないのー。ばっちくなるでしょー」
「……ばっちくないもん。きれーきれーだもん」
兄が来てくれて嬉しいくせに、そのことに安堵して、ふてくされた。のどが痛くて、手足が痛くて、全部兄のせいだと思ったのもある。
「もうっ！　ばーばがわらってるよ！　おっきくなったのにあかちゃんみたいねーって！」
そう言った兄の指先を見ても、誰もいなかった。代わりにいたのは、私が、常日頃感じていた存在。
「……？　ちがうよぉ、じーじだよ？」
そこにいたのは、お父さんよりも若そうな、男の人。でも、私は、その人が自分の祖父だと、誰に言われるでもなくわかっていた。
「また兄ちゃんとちがうことといってー」

仕方がないなと言わんばかりに、私の両手を引っ張って立たせた。そして、手をつないだまま「ほら」と言って指をさした。その先には、仲睦まじく寄り添い合う一組の男女が居た。私はこの時初めて、祖母を見たのだ。兄も同様に、この時初めて祖父を見たらしい。

どちらともなく手をつなぐ。

兄の短い髪では、横顔を隠すこともできない。対して私は、少し俯き、髪がさらりと流れるのを感じていた。というか、久々の妹との手つなぎで照れるって、何事？　若干気味悪いんですけどー。

それはそうと、本来の目的を確かめるべく目線を上げた先には、やはり一組の男女がニコニコと微笑んでいた。

「……いつまで見れんのかなー」

「なんか、孫の花嫁姿を見るのが夢とか生前言ってたそうだから、少なくともお前が結婚するまでは居るんじゃね？」

「え、」

そんなのはまだまだ先だとは思う。思う、が……。

「どーしよっかなぁ」

手をつないだままパタリと横になる。

「……とりあえず、寝れば？」

そういえばすっかり忘れていたが、昨夜は調子に乗って夜更かしをしてしまったのだった。

「そーする……」

相変わらず、遠くでバイクの音が聞こえ、子供たちの笑い声が響き、春の匂いがして……複数の人に見守られる気配を感じながら、私は意識を手放した。

（後書き）

ふと思いついたお話。随分前に書きあげて放置していたものを投稿。

兄には祖母が見えて、妹は祖父が見える。手を繋ぐことによって、二人には祖父母が見える。ただ、それだけ。

兄妹にとって、亡き祖父母とのファーストコンタクトと認識しているのはこの時だけれど、それ以前にも手を繋いだことはもちろんあって、その時もそっと見守っていたのだろう。

ちなみに妹の「どうしよう」は見えなくなったらどうしようです。

……蛇足過ぎました。長々とこんなところまで読んで下さりありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8953z/

少し、不思議な話。

2011年12月28日02時45分発行